

「スマイリースマイル」

水沼健

女 2 女 1 男 3 男 2 男 1

1 女1、女2、男1

女1、ベッドの上にいる。女2、入ってくる。

女2 ちゃんと寝てるか、おばさん。

女1 うん。

男1、入ってくる。

女2 座れよ。

男1 ああ。なるほど。

女2 うん？

男1 座るよ。なるほどなるほど。

女2 うん？

男1 いやなんでもない。

女2 好きなどころに座ってくれ。

男1 (座る) ほかに泊まってる客はいるのか？

女2 おまえ客じゃないだろ。

男1 うん、おれは客じゃない。

女2 客は誰もいない。建物をいろいろ修理しないとイケないところだから、だれも泊めてないんだよ。大丈夫か？ 子供たちにずいぶん蹴られてたろ。あいつらどこからやって来たのかな。この辺

りはもうあんまり人も見かけないんだよ。だから珍しいなって、あんなどころに人がいるところ見るのは。しかもなんか太った人が寄ってたかって蹴られてるし、傘持ってたてよかったよ。わたしも傘がなかったらさすがにちいさな子供だとはいえ、退治できなかったと思うな。まあ命の恩人だよわたしは。

男1 うん、助かったよ。

女2 まあ恩人でほどでもないか。まあこんな部屋だけど、あそこよりはいいだろ。あのおばさんと、わたしと三人で寝ることになるけど。いやほかの部屋がな、あるにはあるんだけど、ちよつとふさがってて、物置みたいになってるんだよ。ちよつと建物全体の修繕をしているところだから。いつからあそこにいたんだ？

男1 そうだな、いつからだろう。

女2 船が出ると思って待ってたんだろ。

男1 いやそういうわけじゃないけど。

女2 しかしな、あそこはもう船は出てないんだよ。橋ができたからな。みんなもう船なんか乗らなくなったから。車だな。車でどこにも行けるようになったから。おかげでこっちのほうは何にもなくなっちゃったんだな。今でもたまにいるんだよ、おまえみたいにそのうち船が来ると思って、いつまでもあそこに座って待ってる人が。

男1 その人はなんだ？

女2 え、ああ病気なんだよ。気になるか？ まあ、寝てるだけの人

だから気にしないでくれ。

男1 なんの病気だ？

女2 なんだろうな？ 詳しくは知らない。心配するな。たいした病

気じゃない。

男1 うん。おれみたいなの、なんだって？

女2 うん？ なにが？

男1 そんな話してなかったか？

女2 そうだったかな。なんで殴り返さなかったんだ？

男1 え？

女2 あの子供に。おまえなら殴り返したら退治できたんじゃないの

か？ おまえくらい太ってたら、あんな小さな子どもなんかすぐ
だろう？

男1 それはそうだけど。

女2 わたしはああいうのは我慢ができないんだ。すぐに手を出しち
やうなんだよな。ああいうひどいことする奴は許せないんだよ、い
くら小さい子供でも。

男1 確かにおまえのほうが目があった。あんなに傘で殴りつけるこ
ともなかった。ひどかったのはお前のほうだ。頭から血流してた
じゃないか、あの黒いほう。

女2 そうか。いまは悪かったと思ってる。なんであんなところに
いたんだ？

男1 いや、電気がついてたのがあそこしかなかったからな。人を

探しに来たんだ、船着き場の近くにいて聞いてたんだけど、橋
を渡って来たんだ。まちがえたな、橋からこんなに離れてるとは
思わなかった。おかげでずいぶん歩くはめになってしまった。あ
そこに着いた頃にはへとへとになってしまっ、しばらくあそこ
で休むことにしたんだ。そしたら雨が降り出して動けなくなっ
てしまったんだよ。

女2 たしかにあの子供大丈夫かな。だいぶ手ごたえあったよたしか
に。え、なんであそこにいたって？

男1 人を探してるんだ。

女2 人？

男1 龍造という男を知ってるか？

女2 龍造？ なに龍造だ？

男1 村上だ、村上龍造。

女2 そいつがどうした？

男1 だからそいつに会いに来たんだ。このあたりにいるはずなんだ
が。知らないか？

女1 知らないな。会えたのか？

男1 いやだからまだ会えてないんだよ。

女2 ちょっとは痩せたんじゃないのか？

男1 え？

女2 橋からあそこまで歩いてきたんなら半日くらいかかるだろう？も
っとかな、わたしならそんなことしたくないけどまあとにかく、

ちよつとくらい痩せたんじゃないのか？

男1 え、あそうかもしれないな。

女2 きつと痩せたよ。

男1 ここは何の部屋だ。従業員室かなんかか。

女2 まあ、そうだな。管理人室だな。わたしはだから管理人だ。

男1 そうか。言っておくが金はない。

女2 それはもう聞いた。金はいいよ。おまえ客じゃないだろ。

男1 まあ、もちろんまったくないわけじゃない。じつは少しはある。

女2 どっちでもいいよ。

男1 正直に言うときだけ残しときたいと思ってるんだ。なにしろその村上龍造という男に会わないといけないわけなんで。会えば何とかなるんだけど、会えるのがいつになるか今はちよつとわからないし。うまくしゃべれてるかな。まあそんなことはお前には関係ないだろうけど。いや、人と話するのは久しぶりなんだ。

だからうまくしゃべれてないかもしれない。

女2 そんなことはない。うまくしゃべれてるよ。眠たいなら寝てくれ。疲れてるんだろ。どこで寝てくれてもいい。静かにしてくれ

た方がわたしも実はありがたいんだ。ありがたいというか、いまちよつとこれから難しい作業をしているんで、集中したいんだ。

ちよつど難しいところやってるから。あまり難しいところだったから、いったん休憩しようと思って散歩したら、ちよつどおまえが子供に蹴られているところを見つけてしまったというわけな

んだよ、命の恩人になったわけなんだ。だからちよつと黙っておいてくれ、これから集中しなくちゃいかん。

男1 そうか、悪かったな。

女2 すまないな。(間)腹へってないか？

男1 え？

女2 あとでなんか作ってやるよ。ありあわせのもんしかないけど。

男1 ああ、それはありがたい。しばらく何も食べてないんだよ。

女2 なんせ客がいないからな、何にも用意してないんだよ。なにかあったと思うけど。腕にはほら、自信はあるんだけどまずかったらごめんな。おまえも痩せた分とり返さないといけないしな、そうだろう？

男1 ああ。

女2 ちよつと黙つといてくれ。いまちよつと

男1 え、いやうん。

女2 (間)名前なんだって？

男1 え？

女2 さっきの。いやもしかしたら弟なら知ってるかもしれないと思つてな。弟のほうがこの島のことは詳しいんだ。だから一応名前を聞いてこうと思つてな。さっきの、おまえが探してるやつ。

男1 村上龍造だ。みんな知ってる男だから、誰に聞いても居場所を教えてくれると聞いたんだけど。

女2 え、知らないな。もう一回教えてくれ。

男1 村上龍造。

女2 聞いたことがない。まあ弟なら知ってると思うよ。

男1 頼むよ

女2 もう一回教えてくれ。

男1 村上龍造。

女2 もう覚えた。あいつが来たら聞いてみよう。いまちょっと。邪魔しないでくれ。

男1 あ、うん。

女2 (間) 今直してるのは電話なんだ。ここもいつまでもこのままというわけにはいかないし、これが直れば遠くからお客さんをおぶこともできるだろう。まずはだからこれを直さないと思ってる。いやここはたいへんなんだよ。建物が古い作りだから。屋根を直したり、水回りを直したり、やるのが次々あるんだ。古い家だから、一つ直したらすぐ次の駄目なところが見つかったりきらない。古い家なんだよ。

男1 大変だな。ひとりでやってるのか？

女2 そうだ。もともとは弟がやってたけど、いまはもうすっかり任せられたんだ。弟はあまりこういう仕事は好きじゃないみたいだから、しばらくしてたけどわたしに押し付けた。わたしはほら、こういうのは得意だから。

男1 どこにいるんだ？

女2 弟か？ ここには住んでない。離れたところに住んでいるから

今日はたぶん来ない。海が近いからいろんなものがすぐに駄目になるんだ。わたしはほら、小さい時から、手先が器用だったから、

なにかとこういうことばかりやらされるが多かったんだ。あ、弟は乱暴ものだから客じゃないやつを泊めるところをもし見つかつたら、暴れだすかもしれないけど、たぶん今日は来ないから大丈夫だ。

男1 え？

女2 心配なのか？ でもたぶん大丈夫だ。弟は他の仕事をしてるのだから、ここにはめったに顔も出さない。見つかることはないからたぶん大丈夫だ。このことはもうすっかりわたしに任されてるし、あいつもそれなりに忙しいみたいだし。ちょっと、集中させてくれ。

男1 うん。

女2 (間) わたしはな、落ち着けばけっこうほら、なんでもうまくやれるんだよ。むかしからみんなにそういわれて、わかっているんだけどつい急いちゃうんだな。性格がどうもせっかちなのかな。落ち着いてやればうまくやれるんだけど。それはわかっているんだけど、できないんだよな。おまえはどうなんだ、そういうの？

男1 どうだろう。

女2 ちょっと待っていてくれ、もうすぐだから。そしたらなんか作ってやるよ。ありあわせのものしかないけど。

男1 ああ、うん。何も食べてないからありがたい。

女2 おまえ弟に似てるな。じつは見かけたときからそう思ってたん

だけど、やっぱり似てるよ。あいつもなんか、そんな感じなんだよ。いつも何か食わせろっていつてるんだよ、あいつ。

男1 いやおれは別に。

女2 そうなんだよ。名前はあるのか？

男1 おれか？ 名前はもちろんあるよ。

女2 なんだ？

男1 村上、あの、俊太郎だ。

女2 弟もいつもなんかよくわからないもの食ってるよ。

男1 おれはだから食ってないんだよ。

女2 ははは、そうなんだよ。あの、眠たくなったらいつでも寝てくれよ。

男1 あの、おまえがどう思ってるかは知らんが、いちおう伝えておく。

女2 なにを？

男1 おれは実は、太ってるように見えるけど、そう見えるだけでほんとはこんなに太ってるわけじゃない。

女2 え？

男1 これは説明するのは難しい。

女2 どういうことだ？ よくわからんな。

男1 だから説明するのはちょっと難しいんだ。いやなにがいいのかという、そんなにおれのことを心配してくれなくてもいい

てことだ。

女2 じゃあなにもいらんのか？

男1 いやもちろんあるなら、もらうけど。

女2 なんだよ、いるのかよ。あ。まずい。

男1 うん？

女2 まずいまずいまずい、その椅子に座ったらだめなんだった。

男1 え？

女2 おい、ちょっと立て。離れろ。

男1 え、いや、うん。

女2 どうしよう。まあいいか。おまえこの椅子に座らなかったことにしてくれ。

男1 え、なんで？

女2 いやこの椅子に座ると弟がすぐ怒るんだよ。わたしが触っても怒るくらいだから、おまえみたいな太ってるやつが座ったらなにするかわからない。

男1 ええ？

女2 大丈夫だ。おまえは座ってない。はじめからこっちに座ってた。

男1 うん。

女2 もしあいつに会ったら必ずそういつてくれ。はじめからこっちに座ってたって。

男1 わかったよ。

女2 普段はおとなしいんだけど、いったん切れると見境がなくなる

んだ。まあ私がいれば大丈夫なんだけど。見てないな。おい。

女1 見てない。

男1 今日はたぶん来ないんだよな。

女2 そうだな、たぶん来ない。ちなみに弟はものすごくよく切れるナイフを持っている。まちがえてこの前、自分の指を一本切り落としたくらいだ。

男1 え？

女2 二本だったかな。まあ来たらわかるよ。

男1 あの。

女2 うん？

男1 絶対来ないんだよな？

女2 たぶんな。でも忘れたところに突然来るときもある。でも何日か前に来たばかりだから、当分来ないと思う。もし来てもおまえのことはわたしが説明するから心配するな。

男1 よろしく頼むよ。

女2 うん。たぶん大丈夫だ。弟はわたしの言うことは何でも聞くから、話せばわかってくれる。おそらく心配するな。よし、じゃあちょっと集中するから。

男1 ああ、うん。(間) 窓があるのか？

女2 窓？ 窓なんかないぞ。

男1 そうか。

女2 なんでだ？

男1 雨の音が聞こえる気がしたんだが気のせいかな。

女2 窓なんかない。見たらわかるだろ。

男1 ずっと雨の音ばかり聞いていたから、耳から離れないのかもしれないな。田舎にしてはなかなかにぎやかなところだと思ったんだけど、にぎやかなのはあれか、橋の周りだけなんだな。あ、すまん。話をしてしまった。

女2 いいよ。そいつも太ってるのか？ そのなんとかってやつも。

男1 村上龍造な。

女2 ああ、うん。そいつ。

男1 さあ、どうだろう。

女2 うん？

男1 会ったことないからわからない。そいつはおれの父親なんだ。でも顔を見たこともない。太ってるかどうかもわからない。

女2 父親？

男1 うん。

女2 おまえ父親の顔を見たことがないのか？

男1 母さんに言われたんだ。死んだら会いに行行って、それでこの島に来たんだ。そういわれるまで父親がいるかどうかなんて考えたことがなかったんだけど、いきなり言われて驚いたよ。それでこの前死んだからおれはそいつに会ってかあさんに言われた言葉を伝えないといけない。

女2 お前、死んだのか？

男1 ちがう、死んだのはうちの母さんだよ。

女2 ああ、そうか。なんて言われたんだ？

男1 まあ簡単に言うと、おれたちのものを全部返してもらえって、ほんとはおれたちにもらえるはずのものをなにひとつもらえなかったんだからって、くれなんて言うんじゃない、かえせって言うんだってな。一言も間違えるなというからメモに書いてきた。

女2 なんて？

男1 龍造、こいつはヤル造じゃ、覚えとるか。どうせおまえはあっちこつちで子供作っては放り出しとるけん、この子のことも憶えてないかもしれんけどのう。おまえやるやるいうて、なにひとつ仕事せんけん、この子にヤル造って名前つけたんぞ。覚えとるか？ おまえと私の子供なんぞ。おまえが今持つとるもんは、ほんとは全部この子がもらわんといけんのじゃ、やけんこの子に返すんじや。わかったな。全部じゃ、今持つとるもんぜんぶ返すんぞ。ほなわたしは死ぬけん、ほなの。珠子。

女2 結局何もらえるんだ？

男1 いやだから会ってみないとわからない。なにをもらえるかどうかかわからないし、いまさらそれほど会いたいと思ってるわけじゃないけど、気がついたら橋のところまで来てたんだ。とにかく母さんの言葉を伝えることだけはしないと、約束してしまっただから。それだけでできればそのまま帰ってもいいとも思ってる。まあそんなわけで、何日かここに世話になるかもしれない。もしそいつに

会って金をもらえたら、宿代も払うよ。

女2 おまえの母さんはこの島の人間なのか？

男1 どうもそうらしい。おまえはずっとこの島に住んでるのか？

女2 親はアメリカにいる。

男1 アメリカ？ アメリカのどこ？

女2 ほらあれ、あの、あそこニューヨークじゃないほう。

男1 ああ、うん、あるある。

女2 そこだ。

男1 そうなのか。

女2 うん。うちは、両親とも元気だな。元気でしょうがない。殺しても死なないような親だよ。アメリカでな、牧場で馬を飼ってステーキ食べてるみたいだ、だからアメリカといっても田舎のほうだな。

男1 じゃあなんでお前はここにいる？

女2 まあいろいろあつてな。今度話してやるよ。わたしも、この家のいろいろが直ったらアメリカに行こうと思ってるんだ。まあただ、この家はつきからつきへと直さないといけないところが出てくるから、なかなかアメリカに行けないんだ。

男1 電話は直りそうか？

女2 電話？ ああ、もうちょっとだ。最後のところなんだけど、このところが一番むずかしい。

男1 わるかったな。集中してくれ。

女2 ああ。

男1 死んでな、誰かが線香あげに来るかもしれないと思って、急いで部屋をきれいにしたんだけど、誰も来なかったんだ。隣の白井さんだけだったかな。なんか、人が来た時何か食べるものがあったほうがいいだろうと思ったんだけど、なにもなくて、隣の白井さんにごはんを分けてもらっておにぎりをつくったんだけど、けつきよく白井さんしか来なかったの、おにぎりも白井さんが食べていったな。でも白井さんはおれが作ったおにぎりはうちのより上手だと言ってくれて、だからつくった甲斐はあったのかな。さっきの話だけど、おれが実は痩せてるっていうのはほんとうなんだ。うちはあまり食べるものがなくて、母さんの足がほんとに悪くなってからは、特にそうだったんだけどいつだったか、うんこしてるとき思いついたんだ。これはもったいないなって。せっかく食べたものを外に出すのはもったいないって。だからその日からうんこするのをやめてみたんだ。そしたらたべたものがいっまでもおなかの中において、なんだかほかほかするし、おなかも減らなくなったし体もふっくらしてまるでたくさん食べてる人みたいになったしで、いいこと尽くしだなって。母さんにその話をしたら喜んでくれてな、母さんもやってみるって言って、母さんは元々便秘だからうんこ止めるのはお前よりうまいよって、それからまるでお金持ちみたいにふたりで太って行ってうれしいねって、まるでお金持ちみたいだねって

女2 (泣いている) いい話だなあ。なんか食べさせてやるよお。ち

よつと待っててくれ。これでも着てくれ。弟の服だけど、たぶんおまえは弟に似てるから、ちょうどいいと思う。

女2、出ていく

男1 うううう(服を着ている、小さいので苦労して着る)ふう。

女1 それはわたしの服だよ。

男1 え？

女1 それはわたしの服だ。

男1 あ、そうなんですか？

女1 伸びるから返してくれ。

男1 ああ、はい。

女1 ヤル造。

男1 え？

女1 さつきちがう名前、言ってたな。

男1 ちよつとまちがえました、まちがえたというか、うん。

女1 パン食べるか？

男1 パン？

女1 パン食べるか？

男1 はあ、でもいまあの人になにか食べれるものを作って持ってきて

てくれるみたいだから。

女1 何も持ってこないよ。

男1 え？

女1 あいつは何も持ってこない。なにか探しているふりをしてるだけだ。あいつはここになにかあるかぜんぜんわかってないからな。電話もさっきからちっとも直らないだろ。あれも直してるふりなんだよ。ぜんぜん直し方なんか知らないからあいつは。パンはここにある。食べたいなら持って行ってくれ。

男1 いただきます。

女1 今日はな、一日ずっと寝てないといけない。

男1 どっか悪いんですか？

女1 悪いのはおみくじだ。おみくじがな、悪かったんだよ。引いたやつにひどいことが書かれてたんだ。

男1 おみくじ？

女1 そうだ。いうこと聞かないと罰が当たる。

男1 あの、なんであの人は電話を直すふりなんかしてるんですか？

女1 そうしないと、ここから追い出されるからだな。

男1 追い出される？

女1 あいつもあいつなりにがんばっている。おまえ直せるなら直しておいてくれ。

男1 え？

女1 直せるか？

男1 いやどうでしょう。直したことはないですけど。

女1 直しておいてくれ。

男1 できるかな。

女1 頼んだぞ。あいつが寝てる間に直しておいてくれ。喜ぶよ。

男1 はあ。

女1 ヤル造。

男1 へ？ 寝たのか、早いな。

女2、戻ってくる。

女2 うん？ なにを食べている？

男1 これはパンだ。寝てる人にもらった。あのさっきの服、あの人のだった。

女2 え、あ、間違えた。こっちだ。これを着てくれ。

男1 ああ、であったのか？

女2 なにが？

男1 いや何か食べるものを探してくれたんじゃないか？

女2 ああ、探してきた。くまなく探したんだけど何もなかったよ。

すまない。ありあわせのものでも手っ取り早く作ろうと思ったんだけど、なにもなかったから何も作れず何も持ってこれなかった。

それでも料理にはほら、自信があるから作りたかったんだけど。すまない。ちよつともらっていいか、それ。

男1 え、ああいいよ。

女2 うん、パンだな。

男1 塩あるか？

女2 塩？

男1 うん、なんか母さんがなんにでも塩をかけて食べる人だったの
で、どうにも塩がないと物を食べた気がしないんだよ。

女2 探してきてやろうか。

男1 うん。いや、やっぱりいいよ、今日はこのまま食べよう。

女2 そうか？

男1 食べたら寝るよ。

女2 そうか。ゆっくり寝てくれ。

男1 どのへんで寝たらいい。

女2 どのへんでもいいよ。そこでいいじゃないか。

男1 おまえはどうするんだ？

女2 わたしはもうちょっとだけ作業してから寝る。

男1 朝までやるのか、おまえも寝たらどうだ？

女2 大丈夫だ。わたしはほら、こういうのは得意だから。

男1 手伝おうか。

女2 いいんだよひとり。あれ？ ねじ回しがないぞ。ねじ回し。

おまえ盗んだか？

男1 ねじ回し？

女2 そうだ、わたしのねじ回しだ。大切なねじ回しだ。盗んだだろ。

男1 え、いや知らん。

女2 あれ？ ない。どこにも持って行ってないぞ。ここに置いて、

食べ物を作りに行って、(出ていき、戻ってくる)戻ってきて、な
いじゃないか。どこいった？ ここに置いて、食べ物を探しに行
って、(出ていき戻ってくる)戻ってきて、やっぱりないじゃない
か。

男1 ほかにないのか？

女2 あれしかない。大切なねじ回しだ。ここに置いて、食べ物を作
りに行って、(出ていき戻ってくる)戻ってきて、ない。落ち着け。

そうなんだ、落ち着いてやったら、大丈夫。ここに置いて、食
物を作りに行って、(出ていき、しばらくたって戻ってくる)戻
ってきて、ない。落ち着け、いつも言われてるんだ、落ち着けは
できるんだからわたしは。つつい急いでしまうからいつもま
くいかないんだ。ええと、ここにおいて、え？ いつ置いた？

男1 いやしらない。

女2 置く前なにしてたつけ？

男1 いつ置いたんだよ？

女2 だからそれを聞いてんだよ。あ、うんこの話したな、あの時持
ってたつけ？ その前はなんだ？ ニューヨークか？

男1 それはだいぶ前だな。その前はおれの父親の話かな。

女2 あ、なんとかってやつ。

男1 龍造。

女2 え、その時持ってたかな？ うんこ、をしない。へえ、すごい

な。で、なにか食べ物を作りに行つて、(出ていき戻ってくる)戻つてきて、ない。

男1 食べ物を作るところのあたりに置いてきたんじゃないのかな？

女2 うん？

男1 食べ物を作りに行つてくれたら？

女2 だれが？

男1 いや、お前が。

女2 おお、そうだ。

男1 どこに行つたんだ？

女2 どこだっていいだろ。

男1 いやどこだっていいけど、そこじゃないのか？

女2 おお。

2 女1、男1、男2、男3、女2

男1、寝ている。男2、立っている。

男2 おい。起きろ。

男1 え。

男2 おまえ誰だ？

男1 え。

男2 おまえ誰だ？

男1 あ、弟か？

男2 うん？

男1 あんた、弟？

男2 弟？

男1 あの、お姉さんの。

男2 お姉さん。

男1 お姉さん。

男2 おまえ誰だ？

男1 わたしは、あの、客ですが。

男2 客？

男1 あの、あなた弟でしょう。あの、名前は知らないけど、この。

わたしは問題ありません。大丈夫な男です。わたしはあなたのお姉さんに連れてきてもらつて昨日ここで眠らせてもらったんです。それはあなたのお姉さんから説明してもらえはります。ええ、問題ありません。

男2 ここ？

男1 この。

男2 おまえ誰だ？ なんでおれの部屋で寝ていた？

男1 おれの部屋？

男2 そうだ。

男1 ここはあなたの部屋なんですか？

男2 おれの部屋だ。

男1 ここはお姉さんの部屋だと聞いてたもんですから。それもお姉さんに聞いてもらえればわかります、お姉さんがここは自分の部屋だって言ってきましたよ。弟は離れたところに住んでいるからしばらくここには来ないって。

男2 ここはおれの部屋だ。

男1 え、じゃああれは嘘だったんですか？ お姉さんの言ってたことは。

男2 とにかくここはおれの部屋だ。

男1 え？

男2 おまえ誰だ、なんでここにいる？

男1 いやですからどうでしょう。なんているかという今お話しした通りで。その、お姉さんという人に連れてきてもらって昨日ここに来たんですが。出て行けということであればすぐにでも、いやお姉さんはどこに行ったんです？ お姉さんがいればそのあたり説明してもらえるとと思うのですが

男2 ここはおれの部屋だ。おばさん。

女1 うん？

男2 もう起きてるのか？

女1 起きてる。きのうより調子がいい。

男1 あ、あなた説明してくださいよ。

女1 引いてきたか？

男2 引いてきた。

女1 今日はいいはずだ。少なくとも昨日よりな。

男2 昨日はひどかったからな。

女1 最悪だった。おかげで一日中寝ていたぞ。

男2 どっちにしろ一日中寝てるだけだろ。

女1 はやく読め。

男2 申年、八月生まれの人。午前中はひどく悪い。願い事、まったく叶わず。恋愛、成果なし。失ったもの、見つからず。旅立ち、行かぬが吉。商い、危険。争いごと、必ず負ける。待ち人、来ず。病氣、治らず。午後からも引き続き悪い。商いは大いにしくじる。大きな決断は避けるべきだがどうしてもというなら夕方が良い。病氣はますます悪くなり、回復の兆しなし。

女1 昨日よりはいい。

男2 昨日よりはいいな。

男1 昨日はなにが書いてあったんだ？

男2 待ち人来ず。

女2 ん？

男2 なんか来てるぞ。

女1 こいつは昨日来たんだ。それにこいつは待ち人じゃない。おまえ昨日あのあとなにしていた。

男2 釣りだ。

女1 雨降ってたろ。

男2 雨降ってた。

女1 雨降ってる日は魚は釣れないと教えたぞ、忘れたのか？

男2 釣れた。

女1 なにが釣れた。

男2 ぎざみだ。

女1 そんなもん釣れたうちに入るか。

男2 でも釣れた。

女1 今日はなにをするんだ？

男2 今日は、まあ釣りだ。

女1 だから雨の日は釣れないっていま言っただろ。

男2 なにをしたらしい？

女1 自分で考えろ。おまえが考えるんだよ直道。

男2 どうせ文句言われるだけだ。

女1 雨漏りは直したのか？

男2 あああれか。無理だった。

女1 もう一回やってみろ。

男2 どうやったらしいんだ？

女1 わたしは知らない。おまえがだからどうやったらしいか考える

んだよ直道。

男2 考えるのはいやだ。おれは考えない。

女1 考えろ。

男2 むう。

男1 あの。

男2 なんだ？

男1 わたしはどうすればいいものでしょうね。

男2 まだいたのか。

男1 ええその、わたしもどこにもいないというわけにはいかないの
で、そうでしょうか？ どこかにいないといけないわけでした、今
はたまたまここにいるというわけなんです。

男2 なんかお前、おれに似てるな。まるでおれだな。そう思わない
か？ 名前はなんだ？

男1 村上です。

男2 村上か、村上、村上、村上か。

男1 珍しいですかね、この辺りはみんな村上だと聞いてきたんです
けど。

男2 村上、なんだ？

男1 村上、あの、俊太郎です。

女1 ヤル造。

男1 ヤル造です。

男2 村上、ヤル造。まるでおれだな。よく似てる。

男1 え。そうですかね。どこらあたりがですかね？

男2 おれの服を着ているところなんか、まるでおれだ。

男1 あ、いやこれは、あなたの服でしたか。ちょっとお借りしただ
けなんで、すぐ返します。

男2 やるよ。おれは気前がいいんだ。

男1 あの、ところでお姉さんはどこに？

男2 うん？

男1 いや、あなたのお姉さん。ここの管理をしているという

男2 ち。

男1 あの、どこに？

男2 あいつ、まだいたのか。

男1 え、あの人がいちゃだめなんですか？

男2 どうだ。眠れたのか？

男1 え、ああ。まあ眠れましたよ。いや正直に言うとなかなか寝付
けなかったんです。はじめての場所だし、それに女の人がいる部
屋で寝たのはじめてだしでほとんど眠れなかったんです。それ
にあのお姉さんが、一晩中泣きながらなんか、ねじ回しを探して
たんですよ。部屋を出たり入ったりして。いやじつは、あなたが
入ってくる少し前くらいにやっとうとうとしかけてたくらいだっ
たんです。

女1 寝てたよ。

男1 え？

女1 おまえよく寝てた。

男1 まあ意外と寝れました。

女1 寝言もだいぶ聞かされた。眠れなかったのはわたしのほうだ。

男1 え、寝言？ なんと？

女1 ふふふ。

男1 それであいつはどこにいったんですかね？ ちょっとその、う
とうとしているあいだに

女1 爆睡。

男1 爆睡しているあいだにいなくなっただけです。

男2 ここはおれの部屋だ。あいつは関係ない。あいつの言うことは
信じるな。

男1 そうですかあの、よく切れるというナイフを持っているという
話はほんとうですか？

男2 ナイフ？

男1 これもお姉さんが

男2 そんなもん持ってないぞ。

男1 え、やっぱり。どうりで指が全部ついていると思いました。

男2 指？

男1 いや、弟はよく切れるナイフを持っていてまちがって指を二本
か三本切り落としたという話をしていました。

男2 だからあいつの言うことは信じるなっていうただろ。嘘ばかり
言うやつだ。

男1 はあ。わかりました。(座ろうとする)

男2 おい、そこに座るな。

男1 え、あ。

男2 その椅子に触ったら殺す。

男1 え、そうでした。これは嘘じゃなかったのか。むずかしいな。

わかりました、二度と座りません。あなたの大切な椅子ですもんね。

男2 触っても駄目だ。

男1 聞いてます。

女1 こいつも龍造に会いに来たんだ。

男2 そうか。

男1 え、知ってますか？

男2 知ってるよ。おまえそうなのか？

男1 どうもそうなんです。それで会いに来たんです。住んでるところを知ってるなら教えてほしいんですが。

女1 死んだよ。

男1 え？

女1 龍造はもう死んだ。だいぶ前に死んだ。

男1 え？

女1 こいつも龍造の子供だ。

男1 え？

男2 そうだ。

男1 え？ 死んだ？

女1 残念だったな。昨日ここにいた女もそうだ。

男1 え？ でも昨日は知らないって

女1 そうなんだ。あいつは父親の名前もよくわかってないままここ

に来たみたいだな。

男1 え？ 死んだというのは、死んだってことですか？

女1 死んだ。

男1 いつ頃？

女1 いつ頃だったかな。でもずいぶん前だよ。十年以上前だ。

男1 じゃあおれは何しに来たんだろう。

男2 何しに来たんだ？

男1 え、いやまあ。

女1 母親の言葉を伝えに来たんだよな。あれ読ませてくれ。きのう読んでた珠子のメモ。

男1 え、母さんを知ってるんですか？

女1 知ってるよ。これはおまえの字か、なんだ。珠子が書いたのか
と思ったのに。読めるか？

男2 読める。なにかもらえるんだな？

男1 いやだからもうもらえないんですよ。だってもう

女1 わたしのこと憶えてないかい？

男1 え、いや。

女1 憶えてるわけないな。おまえ生まれたばかりだったし。珠子
とわたしはね、いつも一緒にいたんだ。わたしはね、おまえの生

まれたときのことよく憶えてるよ。こんなに肥えた男になるとは
思わなかったけど。

男1 いやまあ。

女1 おまえはな、ほんとにはわたしから生まれるはずだったんだ。

男1 え。

女1 残念ながらわたしじゃないほうから生まれてしまった。

男1 どういうことですか。

女1 聞いてないか？ まあ、話すわけないか。いつ死んだ珠子は？

男1 十日ほど前です。

女1 もっと前じゃないか？

男1 あ、もっと前かもしれません。え、なんで知ってるんです？

女1 なんでだろう。なんとなく、そう思っただけだ。ずっと一緒に

いたからそんな風に思うのかな。よく一緒にいたんだ。だからだ

いたい伝わるというかわかるっていうか。珠子がそうだったかは

知らないけど。珠子もわたしも踊るのが好きでな、二人でいつも

踊ってた。チーム何とかがって名前つけてな。なんだったつけ？二

人で振り付け考えて踊ってたな。学校の玄関のところで、あそこ

はガラス張りだったから、練習するのにちようどよかつたんだ。

暗くなるよとガラスが鏡みたいになってだからいつも夜になるとあ

そこでふたりで踊ってた。正月のな、舞踊大会あるだろ。

男1 いや、知らないですけど。

女1 あるんだよ、祭りのときに神社で大会が。中学三年のときだな。

優勝しなかったな。あいつ踊ってる途中に足を怪我しやがって。

負けたのはあいつのせいだよ。優勝するはずだったのに。おまえ

の父親はな、足を揉むのがうまかつたんだよ。珠子が怪我したと

きにな、神社の石段のところで珠子の足を揉んでな。それを見

てると悔しくなってきたよ。わたしも嘘ついて足を怪我したことし

て揉んでもらったんだ。気持ちよかつた。なんであんなにうま

かつたんだろうな。龍造もまだ中学生だったはずだけど。指の腹で

上手に揉んでくれるんだよ。妙に優しそうな顔になって大丈夫か

とか聞いてくるんだよ。てっきりわたしのことが好きなんだと思

ってたんだけどね。実は今でも思っているんだけどね、龍造は珠

子よりわたしのほうが好きだったはずなんだよ。なんか足を揉ん

でくれる時の指の動きがな、いいんだよ。なんていうんだろ、す

うつと強くて、筋肉のすき間にちようど入ってくるみたいなの。な

んだか揉んでるときにおまえ、指が増えるみたいだぞっていうと、

おまえたちもそうだぜっていうんだよ、踊ってるときに足が四本

あるみたいに見えるぜってな。すっかりわたしのことだと思っ

やないか、その時はほんとにそう思ったんだよ。

男1 確かに足が悪かつたです。

女1 え？

男1 うちの、あのかあさん。

女1 優勝したかつたなあ。

男2 おれのかあちゃんの話もしてくれよ。

女1 うん？

男2 おれのかあちゃんの話、なんかないのか？

女1 うん。ないな。

男2　なんかあるだろ？　この島のことだぞ、知ってるだろ？
女1　おまえの母親は、広島から石鯀とたわし売りに来てた女だよ。
　　年に何回か来て龍造の宿に泊まってただけだよ。それ以上のこと
　　は知らん。なんか派手な服着た田舎もんだったよ。
男2　な。
女1　写真ないのか？
男1　写真？
女1　珠子の母親の。
男1　え、まあ、ありますけど。(財布から写真を出し渡す)
女1　(写真を見て) はははは。
男1　なんですか。
女1　やっぱり巨乳だな。
男1　え、いやそうですかね。
女1　やっぱり巨乳だよ。巨乳だよな。
男2　そうかな。
男1　そうですか。
男2　ふたりとも笑ってるな。
男1　家族写真ですからね。
男2　うん。
男1　いや、家族写真というのは笑ってるもんじゃないんですか。
男2　どっちが母親だ？
男1　見たらわかるでしょ、こっちですよ。

男2　ふたりともでぶだからわからん。
男1　あの。
女1　ふふ巨乳だ。どうだ？
男2　そうかな。
女1　懐かしい顔だな。
男2　懐かしい顔だ。
女1　おまえ知らないだろ。
男2　知らない。
男1　あの、写真はあるんですか？
女1　龍造のか？
男1　はい。
女1　見たいか？
男1　せつかなので顔くらいみたいですけど。
女1　そうだろうな。でもないよ。
男1　そうですか。
男2　あの椅子、どう見える？
男1　え？
男2　どう見える？
男1　どう見えるとは？
男2　おれもおまえと同じでこの島に親父に会いに来た。そして会え
　　なかつた。だからおれも親父の顔を知らない。この椅子に最後に
　　座ったのは親父だ。そうだな？　知ってるか？　椅子というのは

な、座った人間の形にちょっとだけ歪むんだ。よく見ればわかる。そうだな？ だからこの椅子は、最後に座った親父の形に歪んだままなんだ。だからおれはこうやってこの椅子を見ることで、いつだって親父の姿を感じることができる。椅子に座っている親父の姿が見えてくるんだ。

男1 え、あ、そうなんですか。

男2 あ見えてきた、親父。今日も見えるよ。おまえにも見えるはずだ。よく見ろ。

男1 ええと、はい。いや、ちょっと。

男2 こうやって想像することができると。この椅子のおかげで。ありがたい。だからこの椅子には誰も触っちゃいけない。もう二度と親父の姿を想像することができなくなる。

女1 直道。

男2 うん。

女1 その眼鏡とつてくれ。

男2 (ひびの入った眼鏡を取って) これか？

女1 その眼鏡かけてみる。

男1 眼鏡？

女1 龍造のだ。おまえにやるよ。

男1 眼鏡はいらないです。

女1 いいから。よく見えるようになるよ。

男1 そんなわけないでしょ。あ、よく見える。

男2 よく見えるのか？

男1 ええ。おお、よく見える。

女1 おまえにやるよ。

男2 見えてなかったのか？じゃあ、あの椅子もう一度見てみる。

男1 はあ。そうですね。いややっぱりちょっと。

男2 おまえほんとはちがうんじゃないのか？

女1 ほかになんかほしいものはあるか？

男1 え？

女1 この部屋にあるものは何でも持って行っていいぞ。たいてい龍造のものだ。もうほとんど残ってないけど。

男1 え、

女1 おまえは何かほしいものがあるか？

男1 この部屋はどこなんだ？

女1 そうだよ。この部屋は龍造のいた管理人室だ。ここは龍造の宿だよ。おまえが来たかったところだ。おまえはこの部屋で何がほしいんだ？

男1 そうか。なにがほしかったかな？ 母の言葉を伝えに来たんです。それ以上は、なにしに来たか自分でもよくわかってないんです。ほんとは来るつもりもなかったんですが、気がついたら橋のところまで来てて。

男1、部屋をうろついて何かを拾って確かめていく。将棋の駒、の

こぎり、ちびた鉛筆など、

男2 それなんだ？

男1 なんてしようね？

女1 溶接棒の残りかすだな。

男2 溶接棒？

女1 鉄と鉄をくつつけるやつだ、昔、造船場で働いてたからその時のかな、あいつのかどうか知らないけど。いいよやるよ。

男1 いりませんよ。

男2 じゃあおれが。

女1 それは猫の皿だ。

男1 え？

女1 灰皿かもしれない。猫がいたんだ。まあ灰皿としても使ってたと思うけど。

男2 一応それもらつとこう。

女1 ヤル造、おまえどんなやつだと思う？

男1 え？

女1 村上龍造。

男1 いやあわからないですよ。顔も見たことないのに。

女1 そうだな。でもどう思ったか教えてくれ。

男1 え？

女1 なんでもいいよ。

男1 ああ、そりゃ、ひどいやつじゃないんでしょうか。

女1 ひどいやつ。

男1 ちがいますか？

女1 うん。それで？

男1 女にもてるでしょうね。だから、背が高くて、彫が深い顔ですね。当たってますかね？

女1 それで？

男1 あの、猫になつかれるような男ですかね。ええ、たぶん猫が自然と寄ってくるタイプです。なので仕方なく飼うことにしました。髪は天然パーマで、だいぶ白いです。暇があれば煙草吸いながら家の修理ばかりしています。だからだいぶ家が立派になりました。どこでもいつでも煙草が吸えるように家のいたるところに煙草と灰皿を置いています。でも灰皿のうちの一つはいつのまにか猫のえさをいれる皿になりました。家はずいぶん立派になって部屋もあまっているので、造船の仕事をやめて旅館を始めることにしました。なかなか客が来なくて困っています。この島に見どころがないからかもしれない。：わからないのは、だんだん自分が追い込まれていくことです。女には優しくするんだっていうのも言われてきました。女に優しくしたらその分その女がお前を立派な男にしてくれるからって。そうしてきたつもりでした。でもそうすることで自分がいつも追い込まれていくのがわかりました。なかなか立派になれない。でもそれはなぜなんだろう。おれ

はいつ立派な男になるんだろう。言われた通りのことをしているはずなのに追い込まれていくのはなぜだろう。立派になるにはもう時間がない。いつだって時間がなかった。でも今はもうおれには本当に時間がない。ただ家を直しているだけで終わってしまう。

女1 ははは。

男1 当たってますかね？

女1 どうだろう。でも言いたいことはわかるよ。パン食べるか？

男1 パンですか。

女1 いらぬならいいけど。

男2 くれ。

女1 おまえは？

男1 じゃあ。

女1、立ち上がり部屋を物色する、塩の入った容器を見つける、

女1 ほら、塩だ。

男1 塩？

女1 塩振ったらうまいんだろ？

男1 ああ、(塩を振って食べる)名物なんですか？

女1 うん？

男1 このパンは。

女1 名物なのは塩のほうだ。うまいか？

男1 はあ。これは知ってる味です。

女1 くれ。

三人でパンに塩を振り食べる。

女1 ヤル造。

男1 え？

女1 これからどうする？帰るか？

男1 え、ああ。

女1 帰るところがないなら、ここで管理人をやればいい。

男1 管理人？

男2 管理人？

女2 やらないか？

男2 おれがもうやってる。

女1 おまえは何にもできないだろう。

男2 そのうちやる。

女1 じゃあふたりでやれ。なにからやるか二人で考えろ。

男2 おまえ考えろ。

男1 おれがですか？

男2 うん。おれはものを考えたことがない。あとからあの時おれは

何か考えていたんだなって気がつくことはたまにあるけど、ぞつとする。思い出してしまうんだよ。わかるか？

男1 なんだかさっぱりわかりませんが。

男2 ダムをな、作る仕事をしてたんだ。山にダイナマイトを仕掛けて爆破させるんだけど思ったより爆発が大きくなって岩盤が崩れてな、逃げてただけけどその時おれは考えてしまったんだ。なんで足は互い違いに動くんだろうってな。なんでこんなふうできてるんだろうって思わず立ち止まって考えてしまった。おかげで岩の下敷きになってな、死んだんだよ。考えるのもうこりごりだ。

男1 死んだ？ えだれが？

男2 おれだ。だからここにいる。

男1 うん？

男2 おまえもそうだろ？橋を渡って来たんだろ？

男1 え？ 橋？

男2 おまえも橋を渡って来たんじゃないのか？

男1 ああ、そういうことか。死んだのはおれのほうか。

電話が鳴る

女1 取ってくれ。(男2、電話を渡す) うん。うん。あ、そうなの？

そうか。うん。わかった。来たければくればいいよ。(電話切る)

男2 あいつまた来るのか？

男1 ねじ回し見つかったのかな？

男2 ねじ回し？

女1 台風が来てるんだってよ。直してくれたのか。

男1 あ、うん。

女1 あいつも喜ぶよ。

男2 すごいなおまえ。

女1 なんせヤル造っていうくらいだからな、こいつはおまえとはちがう。ほんとにヤル造かもしれない。

男1 いや、ヤル造なのはほんとなんです。

男2 おれは直道。

女1 ヤル造、あのストーブ直せないか？

男2 ストーブ？

女1 あれは龍造がこの宿をはじめるときに買ったやつだ。この島で初めてのストーブなんだ。この宿の名物になるから客も呼べるって喜んでたけど集まってくるのはこの辺のやつらばかりでな。昔は冬になってもストーブ焚く習慣がなかったから、珍しがって冬になるとみんなたいして寒くもないのにあれに当たりに来たんだよ。結局全然客なんか呼べなかつたけど。直せるか？

男1 やってみないとわからないんですが。

男2 じゃあまずはおれが直してみよう。

女1 直ったらお前にやるよ。

男2 わかった。

女1 おまえじゃない。

男1 いやストーブはいらないですね。

男2 おれが直したらおれにくれろ。

女1 おまえに直せたらな。

男2 ほんとか？

女1 でもこいつがなおしたらこいつのだ。

男1 いやストーブはいらないです。

男3、入ってくる。

男3 どうした？ 歩いたのか？

女1 あ、うん。

男3 出ていく気になったのか陽子？

女1 ううん。

男3、バケツを置いて水を入れ薬を入れる。そこに女1の足を入れる。男3、時間を計りながら待っている。待っているあいだナイフを出していじっている。

男3 義成のばあちゃんそろそろかもしれない。この夏一杯かな。

女1 ふーん。

男3 今日は早く帰れた。台風だしな。ここもどうなるかわからんぞ。

ちよつとの間だけでもおれのところに来たらどうだ。ちようど一

志の部屋が空いてるし。ここは危ないんじゃないかってみんな言ってるぞ。どうだ？ 台風の間だけでも。なにかあっても、おれだつてすぐに来れるわけじゃないんだから。陽子。

女1 車買ったの？

男3 買った。

女1 どのなの？

男3 今度のは、アルト。

女1 アルト。

男3 中古の軽だよ。

女1 どの車？

男3 スズキ。

女1 色は？

男3 白。乗るか？

女1 いつか乗る。

男3 いつかっていつだよ？

女1 いつか。

男3 電話直ったんだな？

女1 直った。珠子の子供が直してくれた。

男3 珠子の子供？ また増えたのか？

女1 また増えた。

男3 そうか。結局どこにいたんだ？

女1 え？ 珠子？

男3 ああ。
女1 どこだ？
男1 え、あの大洲です。
女1 大洲。
男3 大洲か。意外と近くにいたんだな。
女1 近いかな。
男3 思ったより近い。もっと遠くかと思ってた。
女1 いちばん龍造に似てるかもしれない。
男3 そうなのか？
女1 なんせ電話直したし。あいつもいつもなんか直してた。
男3 見た目はどうか？ 似てるのか？
女1 うん？ 痩せてて、女みたいなやつだ。割れた眼鏡もかけてる。
男3 そっくりだな。声も似てるのか？
女1 声は似てない。
男3 聞きたいな。
女1 ヤル造、なんかしゃべれ。
男1 え？ いや、なにか？ はじめましてあの、あの村上ヤル造です。
男2 おれは直道。
女1 おまえはいい。
男1 あの、こちらはどちらのかたですか？
女1 うちの兄だ。

男1 ああ、お兄さんですか？ はじめまして。あ、なに話していいかわからないんですが、ここには昨日来ました。あのそうなんです、太っているように見えてほんとに痩せてるんです。似てるんですか？ その村上龍造に。
女1 聞こえる？
男3 うん、わからん。なんとなく感じが伝わるような気もしたけど。
女1 直道と一緒にストーブ直してくれた。
男1 いやまだ直してないんですが。
男3 直ったのか？ じゃあこの冬は助かるな。
女1 うん。
男1 いやだからまだ直してないんですが。
女1 ベッドがぐらぐらするようになった。
男3 そうか。
女1 もっと高くして。
男3 うん。でももう十分に高いよ。
女1 まだ。
男3 これ以上高くすると降りてくるのが大変だ。
女1 まだ、窓の高さまでだ。
男3 うん。
女1 外が見たい。
男3 うん、でも窓はないんだよ。
女1 あるよ。

男3 ここにはない。窓があった部屋はここじゃない。

女1 この部屋だ。

男3 ここじゃない。

女1 ここだ。

男3 うん。

女1 この部屋だよ。もつともつと高く。もつともつと。

男3 これ以上はおれには無理だ。そいつに直してもらえよ。

女1 え？

男3 珠子の子供に。あいつに似てるんなら得意なんじゃないか。

女1 うん。

男3 五分経ったぞ。

女1 うん。

女1、足をバケツから出して、足をタオルで拭く。

顔 (その部屋の高いところに窓があって、そこから月の光が差し込

んでいた。その日、龍造と珠子の結婚の式があってお祝いの酒盛

りがあった。その高い窓から、おそらくまだ続いている酒盛りの

にぎわいが零れて伝わってくるようにも思えたし、まったく入っ

てこないようにも思えた。もうすぐこの部屋に酔っぱらった龍造

が帰ってくる。陽子はその酔っぱらった男を待っている。新婦の

珠子に、自分の代わりに部屋でそうするようにと頼まれたのだ。)

女2 待っててくれ。

女1 いやいやいやいや。

女2 いいから待っててくれ。あいつ、なんかしたがるかもしれない

けど。

女1 そりゃするだろ。

女2 するかな。

女1 結婚式の夜だろ。するだろ。

女2 するかな。ばれないようにやってくれ。

女1 ばれるよ。

女2 ばれるかな。でもだいぶん酔ってるはずだから。

女1 いやいやいやいや。

女2 部屋も真っ暗にしとけば。

女1 絶対ばれるよ。おっぱい触られたら一発だ。

女2 そうか。

女1 おまえ巨乳だから。

女1 うん。

女2 わたしはほら。

女2 でもだいぶん酔ってるはずだから。

女1 無理無理無理。ばれるばれる。

女2 どうしよう。

顔 (珠子はその日の朝もいつものように神社でおみくじを引いた。

そこには、その夜、男とまぐわうととんでもない子供が生まれ、

ひどい人生を送ることになると書いてあった。だからなんとかその夜だけは龍造とまぐあわないようにやりすぎさないといけない。珠子は困ってしまって陽子に相談した。そして二人は考えて、陽子の胸にパンを詰めることを思いついた。パンを詰めて巨乳にするのだ。これでなんとか、ばれないようにやりすぎせるかもしれない。陽子の実家がパン屋だったので、家にいた兄貴に頼んでそれらしい形のパンを二つ焼いてもらった。焼きあがったばかりのパンはとてもいい匂いがした。パンを胸に詰めているあいだ陽子は龍造の指のことを考えていた。龍造の指はああいうことをするときどう動くのだろう。陽子は龍造の指が足じゃないところを触るときどう動くのか知りたかった。もしかしたら珠子はそれを知ってたのかもしれない。陽子のそういう気持ちを知っていて、わざとそうなるように頼んできたのかもしれない。だとしたらおみくじの話は嘘になる。でもそんなことはどうでもよい。いまはもう龍造の指のこと以外は考えることができない。）

女2 じゃあ隠れてるから。

女1 どこに？

女2 まだ決めてない。神社の裏かどっかに隠れようかと思ってる。朝になったら帰ってくる。絶対起きてろよ。

女1 うん。珠子。

女2 え？

女1 子供ができたらどうしよう？

女2 うん。そうになったら、考えよう。

女1 うん。

顔（その部屋の高いところに窓があった。陽子はそこから龍造が帰ってくるのを見たくて手を伸ばしたけど、窓は高くて届かなかった。遠くで平家鳥の鳴き声がする。結局その夜龍造はこの部屋に帰ってくることはなかったけど、まだそのときはわからなかった。どうして平家鳥は夜に鳴いているのだろう。でもいまは考えてもわからないことは考えない。だまって龍造を待つのが役目だ。だからだまって待っていればいいのだ。）

女1 帰ってこなかった。

女2 あそう。

女1 朝まで飲んでどっかで寝たんだな。

女2 そうだな。助かった。

女1 じゃあ帰るよ。

女2 足どうした。

女1 怪我した。

女2 なんで？

女1 窓から外を見ようと思って、壁によじ登ってたら落ちた。

女2 あそう。大丈夫か？

女1 大丈夫じゃない。でもこんどは嘘じゃない。ほんとの怪我だ。

ちよっとおそかったけど。

女2 そうだな。ありがとう陽子。助かった。

女1 その次の年、おまえが生まれた。わたしのほうからじゃなかったけど。

男3 座れ。

男3、女1の足を揉み始める。

男3 痛かったら言えよ。

女1 うん。

男3 どうだうまくなってるだろ。

女1 そうかな。

男3 こつがわかってきたんだ。

男1 あの。

女1 うん？

男1 ねじ回しとかないですかね。

男2 ねじ回さないか？

女1 ねじ回し？

男1 ねじ回しがないと、中が開けられないんです。

男2 ねじ回しがないと開かないんだ。

男1 そんなに複雑なものじゃないので直せるとは思いますが。

男2 複雑じゃない。

男1 まあ、開けてみないとちょっとわからないですね。

男2 開けてみないと。

男1 あと灯油もいりますね。

男2 灯油がいるな。

女1 おまえうるさい。

男3 どうした？

女1 ストープが直りそうなんだって。

男1 いやだからまだなんですけど。

男3 直ったらストープの上にパンを置くとな、なかなかいいよ。

男2 うん？

男3 温もつてな、なかなかいいんだよ。昔はよくやってた。冬にな

るとすればいいよ。

男2 おお。

男3 まあどうせお前たち夏が終わったらいなくなるんだろうから関

係ないか。

男1 あの、指はさっきのナイフで切ったんですか？

女1 聞いているよ。

男3 うん？

女1 指はさっきのナイフで切ったのだった？

男3 指？ なんで？

男1 最初に会った女の人がそんな話してたから。

女1 佐和の子供がそう言ったんだと。

男3 ふうん。これはそうじゃない。新しい仕事になれなくてまちが

えて切ってしまったんだ。だいぶまえのことだし、いまはもう慣

れた。それに指をなくしたおかげで男としての格があがったよ。

女1 格？

男3 男としての格だよ。

女1 でもそのおかげで揉むのが下手だ。

男3 え？

女1 いつまでたってもうまくならない。指が足りないからだ。

男3 前はパン屋をやったんだよ。実家がパン屋だったから引き継

いで。もうやってないけど。みんな橋の周りに移っていった。もう
辺りはもう誰もいなくなったから。こっちにまだいるのは、もう
こいつくらいだ。だからもう店もたんで仕事も新しく探したん
だけどもなかなか長続きしなくて、今のところは去年からか
な、まああそこもいつまでやれるかわからないけど。でもこう
やって時間を見つけて妹のためだけにときどきパンを焼いて持っ
てくるんだ。パンを焼いて、足を揉んでやって。これでもいろい
ろ指圧の本読んで勉強してるんだ。妹はあまりそのあたりのところ
ろ気づいてくれないんだけど。まあそれでもいいよ、おれがこい
つにやれることはそれくらい：

女2 いい話だなあ。

男2 なんだおまえ、いつからいた？

女2 うるさい。雨漏り直したのか？

男2 直してない。

女2 ははは。

男2 なんだおまえ。

女2 わたしは庭に水をまいたぞ。

男2 雨降ってるだろ。

女2 雨降ってる。それがなんだ？

男2 必要ないだろ。

女2 必要だわ。

男2 おいねじ回し出せ。

女2 ねじ回し？ なにするんだ？

男2 必要なんだよ。

女2 ねじ回しはわたしの仕事だぞ。

男2 じゃあ出せ。

女2 どのねじを回すんだよ。

男2 ストープの火をつけるところだよ。

女2 お前にねじ回しは無理だ。

男2 じゃあお前がやれ。

女2 なにをだ？

男2 ねじ回しだ。

女2 どのねじを回すんだよ。

男2 だからストープの火をつけるところだよ。

女2 お前にねじ回しは無理だ。

男2 だからお前がやれって言ってるだろ。

女2 (泣く) 一緒に探してくれええ

男2 はあ？

女2 ねじ回しがないんじゃあ

男2 え？ どこでなくしたんだ？

女2 それがわからんのじゃあ。

男2 おれが見つけてやる。

女2 うん。

男2 この部屋か？

女2 この部屋じゃない。

男2 どこだ？

女2 わからん。あっちかもしれない。

男2 あっち？ わかった行こう。おれが見つけてやる。

女2 うん。

男2 心配するな。絶対見つける。

女2 うん。

女2、男2出ていく。

男3 …いまだにやってるのはこの辺の島だけかもしれないけど、猪

子って言うのは、丸い石にロープを巻いて持ち手を八本くらい作

ってな。小学生だけで、夜一軒一軒廻って、猪子突かせてくださ

いってお願いするんだけど。

女1 いつのまに猪子の話になってる？

男3 え、誰も聞いてなかったのか。

女1 うん。

男3 なにが起こってた？

女1 直道と、佐和の子供が、喧嘩して泣いていっしょにねじ回し探
しに行った。

男3 そうか、仲いいんだな。

女1 うん、時々そうなるかな。

男3 じゃあ誰もいなくなったのか？

女1 珠子の子供がいる。

男3 ああ。直ったかストーブ。

女1 いや。

男3 そうか。

女1 疲れた？

男3 まだ大丈夫。

女1 うん。

男3 さっきの話だけど。あのナイフ。

男1 あ、はい。

男3 おれのお守りなんだ。あれ持っているといろいろなことが我慢でき
きる。いつでも逆転できるような気がするんだ。だから我慢でき
る。だから持ってる。それだけだ。もともとはずっと龍造の指を

切ってやろうと思って持ってたんだけど。

女1 やめろ。

男3 あいつの指のおかげでおれの妹がおかしくなった。

女1 そんな話はやめろ。

男3 ほんとのことだ。だからあいつの指を切ったらおれの妹も昔みたいに戻るんじゃないかって思ってた。でもできなかつた。

女1 やめろ。

男3 もういいだろ、昔のことだ。

女1 嘘だ。

男3 べつに隠すほどの話じゃないだろ。

女1 でもやめろ。聞きたくない。

男3 ほんとの話だ。

女1 うそだ。

男3 知ってるだろ。

女1 知らない。聞きたくない。

男3 ほんとのことだ。ほんともなにもなかつたんだから。

女1 そんな話やめろ。

男3 陽子。

女1 いやだ。

男3 陽子。

女1、男3を蹴り飛ばす。

女1 そんな話やめろ。

男1 大丈夫ですか？

男3 こいつの足は動くんだよ。

女1 そんなことない。

男3 こいつはな、こうやって足が悪いふりをしてずっと待ってたんだ。でもやってくるのはそいつの死んだ子供ばかり。そのおかげでこいつはいつまでもここにいます。そいつのガラクタ集めてずっと待っている。それでも昔はおれの自慢の妹だったんだけど。おまえはどうやって死んだんだ？

男1 え？ ああ、あんまり思いだせないんです。母の蒲団の横にずっと座ってたのは覚えていますが、なんか疲れてしまって、動く気にもなれなくてずっと座ってたのは覚えてます。死んだかどうかともいまひとつわかってないんですけど。

男3 なんて言った？ 陽子？ でも死ぬるなんていいじゃないか。おれたちはずっと生きていかないといけない。こいつのおかげでおれはいつまでも生きて、働かなくちゃいけない。仕事を探し続けないと。家は売ったけど車だけはいいつのために持つとかなないといけない。どっかに龍造の煙草ないかな？

男1 え、ああ。確か灰皿ならここに。えっと煙草？

男3 ぜんぶ吸ったかな。どうせお前も消えていくんだから言うけど、長く生きてるとだんだん死んだ人間の声を聴きながら生きていかないといけない。ずっと死んだ誰かのことを考えながら生

きていくのはなかなかしんどい。なかなかだ。もうそいつの声しか残ってないからな。それでも昔はおれの自慢の妹だった。普通ならいまごろもう家族を持って、子供も大きくなって、ちょっと楽になってもいい頃なのに。おまえのおやはな、おれの妹だけには手を出さなかった。どうせなら手を出してくれた方が、おれもなにかとやりようがあったんだけど。おれの妹のなにかだめだったっていうんだ。まあ手を出したら出したで許さなかったけどな。ナイフの出番があったかもしれないかもな。あいつに見せたことはあつたんだよ。あいつの家の前まで行って。あいつの家が古江のほうでな。塩田跡が近いから変なおいがするんだ。

女1 もういないよ。

男3 え？

女1 だれもいなくなった。

男3 そうか。

女1 兄さんのことが怖いんじゃない？みんな龍造の子供だから。逃げたのかも。

男3 やっぱ親子だな。そっくりだ。

女1 疲れた？

男3 疲れた。

女1 ベッドがぐらぐらするようになった。

男3 そうか。

女1 もっと高くして。

男3 うん。

女1 外が見たい。

男3 うん。でももう十分に高いよ。

女1 そうかな。車買ったの？

男3 買った。

女1 どのなの？

男3 今度のは、アルト。

女1 アルト。

男3 中古の軽だよ。乗るか？

女1 いつか乗る。

男3 いつかっていつだよ？

女1 いつか。

男3 陽子。

女1 うん？

男3 おれがその前に乗ってたか覚えてるか？

女1 前？ ヴイツツ。

男3 うん。その前。

女1 事故したやつ。

男3 それは前の前だ。

女1 なんだろう。

男3 その前もヴィツツ。事故したやつはその前。ワゴンR。

女1 その前は？

男3 カローラⅡ。その前。

女1 カローラⅠ

男3 そんなの無い。シビック。

女1 ああ、うん、その前なに？

男3 マーチ。

女1 その前は？

男3 インテグラ。

女1 その前は？

男3 インプレッサ。

女1 ああ、その前はレガシー。

男3 そうそう。

女1 その前はクラウン。

男3 そうだ。

女1 あれは広かった。乗り心地よかった。その前は狭かった。

男3 GTRか？

女1 あれは狭かった。

男3 しょうがない。

女1 乗り心地も悪かった。

男3 でも速かったろ。

女1 うーん。

男3 あれは速かった。おまえなかなか興奮してたよ。憶えてるはず

だぞ。ちょうど橋が全部できたばかりのときだし。あの時おま

えだいぶん酔ってたな。

女1 ああ、あの時か。だいぶ酔ってた。

男3 おれはそんなに飲んでなかった。

女1 そうかな。結構飲んでたよ。

男3 ぜんぜん酔ってなかったよ。

女1 いつもそれ言う。酔ってたって。

男3 そうか。でも、あれは速かった。おまえすごく興奮してた。橋

の上をどこまでも行けた。

死者たちが再び集まり、女1、男3を取り囲み記念写真。スマイル。

終

参考文献

『管理人』ハロルド・ピンター全集Ⅰ ハロルド・ピンター／喜志哲雄訳

『ベドロ・パラモ』ファン・ルルフォ 杉山晃・増田義郎訳

【上演記録】

2019年9月26日(木)ー9月29日(日)

THEATRE E9 KYOTO

(THEATRE E9 KYOTOオープニングプログラム)

▼キャスト

男1 F. ジャパン

男2 蠟螂襲

男3 金替康博

女1 松原由希子

女2 前畠あかね

▼スタッフ

演出 水沼健

舞台美術 柴田隆弘

照明 吉田一弥(真昼)

音響 堂岡俊弘

舞台監督 浜村修司

制作 垣脇純子 谷口静栄

企画・製作 有限会社キューカンバー

©2019 by Takeshi Mizunuma

禁無断複写、転載。

有限会社キューカンバー

〒605-0942 京都市東山区蒔田町 549-3 藤ビル 2F

Tel | 075-525-2195 Fax | 075-525-2197

E-mail | info@cucumber-m.com URL | <http://cucumber-m.com>